七、占領下の南京

最悪の事件は初めの六週間から八週間に集中して発生したとはいえ、南京大虐殺は数ヶ月間も続いた。一九三八年の春になって、ようやく南京の人々は、虐殺行為が終息し、占領されている間は必ずしも全員が殺されることはないのだということを知った。南京が日本の支配に屈従させられたとき、軍は住民全員を服従させる制度を施行し始めた。

当初は、服従させるべき実体があまり存在していなかった。ある外国人が書いた。「市の無秩序は想像することもできないほどのものです。汚物やあらゆる種類の廃物がいたるところに投棄されています」。ごみや人間の肉が通りで腐っていた。日本人は彼らの許可がなければ何もさせなかったのである。廃棄物や死体を処理することもできなかった。実際に、何日もの間、水門の下に何フィートも積み重なっている死体の上を軍用トラックが通り、人々に日本に抵抗することがいかに恐ろしい結果になるかを印象づけるように、死体を踏み砕いていた。

日本のためにこうむった公共財の損害の合計は、一九三九年の米ドルで約八億三、六〇〇万ドル、私的財産の損失は少なくとも一億三、六〇〇万ドルになるという見積もり値がある。この数値には、日本軍が

持ち去った再生産不能な文化財の損失の価値が含まれていない。

社会学者ルイス・スマイスの指揮の下、国際安全区委員会は南京地域の損害の系統的な調査を実施した。市内は五〇軒に一軒の住居に、郊外は三分の一の各村の一〇軒に一軒の家庭に調査員が派遣された。一九三八年の六月に、六〇ページの報告書が公表され、スマイスは、南京が受けた一二〇回の空爆と四日間の攻城戦による損害は、日本軍が南京に入城した後に加えられた損害の一パーセントにしかならないという結論を出した。

ほとんどの破壊は放火によるものだった。南京市の火事は市の陥落とともに始まり、六週間以上も燃えつづけた。兵士たちは士官の指導にしたがって建物に火をつけ、発火させるために特殊な化学溶液を染み込ませた布片を使用することもあった。彼らは、教会を、大使館を、大型店舗を、商店を、大邸宅を、小屋を焼き払った。安全区内も例外ではなかった。安全区のポンプや消化設備は日本人によって盗まれていたので、安全区の指導者は火事を消すことができなかった。南京大虐殺の最初の数週間で、軍は市全体の三分の一と全商店の四分の三を灰にした。

彼らはロシアの公使館を焼却し、アメリカ大使館を侮辱し、ほとんどすべての外国人の家を略奪した。明白に旗や紋章が掲示されていても無視された。日本人は特にアメリカの所有物には特別な侮辱を用意しているかのようだった。彼らは南京大学からアメリカ国旗を六回も引き摺り下ろし、泥の上で踏みつけ、再びそれを掲げようとするものは殺すと威嚇した。また、ナチと日本政府の間の同盟関係があったのにもかかわらず、ドイツの所有物もほとんどアメリカの所有物とほとんど同じくらいのひどさで被害を受けた。日本人はナチの旗を引き裂き、ドイツ人の家や企業を焼き払い、ヒトラーとヒンデンブルク

の肖像画を盗んだ。「これは、日本人が天皇の肖像画を崇拝することを考慮すると顕著な行為だといえる」。あるドイツ人は書いた。

南京の略奪は城内に止まるどころか、城壁を遙かに越える地域に広がっていた。日本兵は南京の周辺地区を荒廃させた。藁小屋に火を放ち、家具、器具、農具を煉瓦の小屋に集めて一度に火を放って灰燼に帰し、村全体を焼き払った。市の周辺地区の農家からは、家庭用のものも、そうでないものもすべての家畜がきれいに奪い去られた。

また、日本人はアセチレンガスの切断器具を使用し、拳銃を発射し、あるいは手榴弾を使用して銀行の金庫室をこじ開けた。そこにはドイツ政府や民間人の個人用の貸し金庫も保管されていた。兵士たちは彼らの獲物の一部を日本に郵送することを許されていたが、ほとんどの財は没収され、公用として集積された。倉庫は、翡翠(ひすい)類、磁器工芸品、敷物や絵画、金銀の財宝で、あっという間に満杯になった。一軒の保管庫に二〇〇を超えるピアノが集められた。一二月末に日本人は、宝石、芸術品、家具、貴金属、骨董品などの盗んだ品物を日本に輸送するために、波止場に積み上げ始めた。

日本の略奪者たちは、通常は高額な品物を探していた。彼らは外国の自動車を狙うので、安全区委員会のメンバーは、外国人が座っていないものはすべて軍が持ち去ってしまうと信じるようになった（死体を片付けるために使用するトラックも盗まれた）。ところが、日本兵は、南京大学病院に侵入して、ペンや懐中電灯や看護婦の腕時計などの小物も盗み、安全区に何度も何度も押し入って、行くあてのない人々から寝具や鍋釜や食物を盗んだ。ドイツ人の報告書は、一二月一五日に日本人が五千人の難民を整列させ、彼らから合計で一八〇ドルを盗むことができたと記している。ジョージ・フィッチは書いた。

「彼らから、一握りの汚れた米までもが兵士によって強奪された。ちょっとした不満を口にしようものならば確実に死のしっぺ返しがくる」。

一九三八年の一月には、軍用の店舗と国際安全区の米販売店を除けば、公式に開店している店舗は一軒もなかった。事実上、港に入っている船はなかった。日本人が地域の電力工場から約五〇人の従業員を連行して処刑したために、市のほぼ全域で、電気、電話、水道のサービスが利用できなくなっていた（生活用水の不足のために入浴は困難になっていたが、女性たちは洗っていない身体が日本兵の強姦の意思を挫くことを望んで、入浴しないままでいようとしていた）。

市はゆっくりと生活の場に戻っていった。南京の至る所で、家々に侵入して物を持ち去っていく人々が見られた。ある人は床板や木の羽目板を剥がして薪にし、ある人は金属や煉瓦を運び去って自分の家の修繕に使い、あるいは街路でほかの人々に売った。安全区の上海路には、ドアや窓までも含む、およそ想像できるあらゆる種類の略奪品を並べている何百もの行商人たちの前に、黒山の人だかりができていた。この活動は地方の経済を蘇らせ、飛躍させた。戦利品の商人たちの横には、新しい茶館や食堂が雨後の筍のようにならんでいた。

一九三八年の一月一日に日本人は、南京自治委員会という、市の新しい政府を発足させた。これを市内の西欧人の一部は「自治政府」と呼んだ。自治委員会の構成員は傀儡の中国人職員で、彼らは市の監督、厚生、財政、警察、通商、および交通を管轄した。春になる頃に、南京は外面的には、正常な都市機能を回復しつつあるように見えた。水道、電灯、および日々の郵便サービスは再開した。日本の市内

バスが運行され、人力車が通りに現われ、人々は南京から上海まで列車で移動することができるようになった。南京は急速に日本のための慌しい出荷センターになっていった。小型の機関車や、馬、野戦砲、トラックやその他の物資が、毎日、市内から近郊の浦口に向けて輸送されていった。

しかし、残忍な占領政策の兆候は至る所に現われていた。中国の商人は新しい公務員の給与を確保するための重税と法外な賃料を負担させられた。日本人は中国人の消費者向けの軍人の商店を開業し、それを通じて中国人の金や貨幣を吸い上げて、価値のない軍票と交換した。中国人の傀儡政府は市内に残っている貴重品や在庫品を、所有者の有無を無視して没収し、貧困を加速させた。中国人の下級公務員の間では、この状態を皮肉って「我々は今、認可された略奪を行っている」という冗談が語られていた。

重税による民衆からの搾取や押収よりも遙かに驚くべきものは、市内に再登場した阿片だった。日本の占領の前には、阿片は地下の麻薬で、高官や商人は南京の秘密の場所でこっそり吸っていたが、通りで公然と、厚かましく売られることはなかったし、それが青年たちの目に触れるようなこともなかった。市の陥落後は、人々は警察の干渉を受けずに堂々と阿片窟に出入りすることができた。これらの阿片窟では、麻薬を「官土」という阿片を指す用語を使って広告していた。阿片中毒を促進させ、人々をさらに奴隷化するために、南京の日本人は日常的に労働や売春の対価を麻薬で支払った。一〇歳の子どもにヘロインのタバコが売られた。南京大学歴史学教授のマイナー・シール・ベイツは、自分の調査に基づいて、南京地区の約五万人の人々がヘロインを使用しているという結論を出した。これは当時の南京地区の人口の八分の一になる。

踏みにじられた市民の多くは、麻薬の餌食になった。麻薬は、たとえ一時的でしかないとしても、彼

らの生活の悲惨さから逃避させてくれたのである。あるものは、大量の阿片を一度に飲み込んで、自殺を図った。あるものは麻薬を手に入れようと犯罪に走り、その結果、南京市内を強盗の波が襲った。南京市内の強盗発生を醸成させた後で、日本人は犯罪の横行を口実にして占領を正当化し、皇国の法と秩序が必要なのだとお説教した。

日本人の雇用主は、地域の多くの中国人労働者を奴隷以下に扱い、しばしば、些細な規則違反を咎めて彼らを殺した。後に生存者は証言している。中国人の雇い人に不断の恐怖心を植え付けるために、苛酷な環境と気まぐれな懲罰が故意に職場に課せられていたと。日本人が強奪した工場で働いていた一人の中国人は、彼がそこで目撃した数ヶ月間の恐怖を物語っている。同僚の雇い人が日本の監督者にセーターを盗んだと誤って告発されたとき、彼は足の先から喉までミイラのように縄で縛られ、煉瓦の塊で石打ち刑にされて死んだという。石打が終わったときには、身体はほとんど原型をとどめておらず、縄で固められた肉と骨は放り投げられて犬の餌にされた。あるとき、日本人は工場から小さな肩当ての束がなくなっているのに気づき、それがトイレット・ペーパーとして使用されているのを突き止めた。その日に便所を使用したことを認めた二四歳の女性が工場の裏に引き摺り出され、ナイフで首を斬りおとされた。ちょうどその日の午後には、日本の同じ殺人者が、スリッパを盗んだという嫌疑をかけられた一〇代の少年を殺した。

日本人は、南京の人々を使って医学実験まで行った。一九三九年四月に、彼らは市内に人間をモルモットにする研究施設を開設した。人体実験される人を彼らは「材木」あるいは「丸太」と呼んだ。日本人は、揚子江から歩いてすぐの中山東路にある六階建ての中国の病院を防疫研究所に転用し、栄一六四四

部隊と名づけた。研究所の置かれた場所は、軍用空港、花町、映画館、さらに日本領事館、憲兵隊事務所、あるいは中支那派遣軍上層部の本部といった有力な日本の中枢機関の集中する地区の近くだったが、厳重に秘密は守られた。構内の周囲は高い煉瓦塀で囲まれ、塀の上には鉄条網が張られた。施設内は衛兵が巡回していた。職員は、日本に送る手紙に栄一六四四部隊のことをけっして書いてはいけないと命令された。内部では科学者が中国人の捕虜にさまざまな毒物、細菌、致死ガスを注射し、あるいは食べさせていた。実験対象だった物質には、アセトン、砒酸塩、シアン化物、亜硝酸塩青酸塩、そしてコブラ、ハブ、アマガサヘビなどの蛇の毒液などがあった。日本人の科学者は、このようにして毎週一〇人以上の人を殺し、死体を栄一六四四部隊の焼却炉で処理していた。

一九四五年の八月に日本が降伏したとき、栄一六四四部隊の関係者は彼らの施設と資料を破壊し、研究所を爆破し、中国軍が南京に到着するよりも前に逃亡した。この秘密の研究所について知ることができたのは、戦後にこの部隊の科学者の一部がアメリカの尋問者に告白したからである。

身体を害する残虐行為、医学実験、そして麻薬の誘惑から逃れることができた幸運な中国人たちは、軍の脅迫の下の窒息しそうな市内の雰囲気の中で暮らしていた。日本の当局は、人々をピラミッド型の階層に組織することによって、大衆を支配する方法を案出した。一〇軒ごとの家が組を作り、一人の責任者を指名することを命令され、この責任者は一〇人ごとに組を作り、その責任者を指名することを命令され、これがずっと上まで続く。この制度の下で、南京のすべての人は自分の属する一〇人の組の責任者が署名した登録証を携帯することを要求された。このようにして、百人、千人の人間が新しい政府に対する忠誠を誓わされた。また、すべての人が自分の家によそ者や未登録の人がいることを直接の一

○軒の組の責任者に報告するよう要求された。その責任者はその上の責任者に報告し、こうしてニュースは市政府の地区の職員の耳に達することになる。これは日本人の発明ではなく、「保甲」と呼ばれる中国の伝統的な制度を、南京の住民に対する彼らの支配を合法化するために復活させたものである。

日本人はこの保甲制度が行き渡っているかどうかを頻繁に検査した。ときには、登録証を持たない人間を放ち、彼らが市内に落ち着ける場所を見つけられるかどうかを見た。二時間以内に、その人間が捕まらず、報告もされない場合には、その人間が滞在している地域の組の責任者が厳しく罰せられた。国際委員会のアルバート・スチュワードは一九三九年の日記に書いた。「これは、新しい体制への忠誠心を保持させるための日本流の方法だと思われる」。

戦争、放火、そして大虐殺を受けたのにもかかわらず、南京は復興した。壊滅的な飢饉は発生しなかった。それは、日本人が最終的に食料の搬入を認めたからだけではなく、内陸の中国軍を追ってほとんどの日本軍が南京を去った後に、地方の農夫が冬小麦を収穫することができたからだった。一年の間に、肥沃な揚子江デルタの農業の多くは、戦前の水準に近い収穫量を生産した。これは、日本占領下の南京で食糧不足がなかったということではない。城内の菜園や農園は、日本兵によって野菜を没収されただけでなく、農業の収穫を根こそぎ日本の使用に転換することを強いられたために、回復できなかった。また、戦争が長引くと、日本の当局は物資に対する統制を引き締め、石炭や米などの必需品の厳しい配給制を実施した。とはいえ、南京が中国の他の地域よりもひどい飢えや栄養不良を被ったことを示す証拠はない。他の都市、たとえば国民政府の新しい首都重慶などは、この戦争のときには、遙かに深刻な

食糧不足を経験した。

日本の支配下では、阿片やヘロインが盛んに販売されていたとはいえ、南京の住民は相対的に伝染病の罹患率が小さかった。占領後、日本の当局は市内で病死した死体を火葬する政策を厳格に制定した。また、彼らはコレラとチフスに対する積極的な予防接種計画を展開し、人々に年数回の接種を受けさせた。中国人の医療職員が通りと駅に待機していて、歩行者や南京を訪れる人に予防接種を施した。これは市民の間に強い憤懣を引き起こし、多くは注射針で殺されるのではないかと恐れた。西欧の宣教師の子どもたちは、駅で南京に入ろうとする中国人が消毒液の入った皿状の容器に足を踏み入れることを命令されていたことを覚えている。ほとんどの人は、その要求をひどい侮辱だと感じた（西欧人の方は、市に入るときにリゾールを噴霧された）。

数年間で、南京は壊滅から回復した。一九三八年の春に、勇気を振り絞った男たちが市に戻り始めた。あるものは損害状況を検査するために、他のものは金を使い果たしてしまったので仕事を探すために、さらに他のものは家族が戻っても安全な状態になっているかどうかを確かめるために。復興活動が始まると、労働需要が膨らんだ。それに引き寄せられて、まもなく多数の男たちが戻り始め、それから彼らの妻子が南京への移動の流れに加わるのに長い時間はかからなかった。一年半の間に、人口は二倍になった。一九三八年三月の二五万人から三〇万人の間という推定値は、一九三九年一二月には五七万六千人以上という数値に増大した。人口は一九三六年の南京市が享受していた百万人台の水準に届くことはなかったが、一九四二年には約七〇万人という頂点に達し、戦争の間その水準を保った。

日本支配下の暮らしはとても満足できるものではなかったが、多くのものが征服者の存在を認めるよ

うになるにつれ、忍従の感覚が市全体に定着していった。ときには、地下組織の抵抗もあったが、――あるときには、多数の日本人の官吏が集まっていた劇場に誰かが突入して爆弾を投げた――一般には反抗は散発的で少なかった。ほとんどの場合、日本人に対する敵愾心は、ポスターや、ビラや、落書きなどにより、非暴力的に表現された。

南京の苦しい試練は一九四五年の夏に終わった。一九四五年の八月六日に、アメリカ合衆国は日本で八番目に大きい都市広島に、効果が実証されていないウラニウム爆弾を投下し、最初の日に二四万五千人の人口のうちの一〇万人を殺した。日本の降伏が見込めなかったとき、アメリカ人は八月九日に二発目のプルトニウム爆弾を日本の長崎市に投下した。日本人が最終的に、降伏の決断を下したのは、それから一週間もたたない八月一四日のことだった。

日本人は中国の首都だった南京に、降伏の日まで残っていて、その後、大急ぎで市を去った。目撃者は、通りで泥酔した日本兵たちが嘆き悲しんでいる姿が見られたと報告している。地域の住民によって武装解除された日本人が道端で跪かされ、打ち据えられたという噂を聞いたものもいた。しかしながら、日本の駐屯兵に対する報復は限定的だったようである。多くの住民は、日本の敗北が真実ではなかったと話がひっくり返ることを恐れて、勝利を祝うどころではなく、この混沌とした期間には家の中に隠れていたのである。撤退は迅速で、日本兵に対する大規模な迫害や投獄はなかった。ある南京市民は回想する。彼女は日本の降伏後、数週間、家の中にいて、彼女が再び外に出たときには、彼らは去っていた。